

中国における訪問教育に対する満足度と困難要因に関する研究

訪問教育担当教員の視点から分析を中心に
○王青童 竹田一則
(筑波大学大学院) (筑波大学人間系)
KEY WORDS: 訪問教育 中国 教員

（目的）

中国における訪問教育の担当教員を対象とし、その現状と課題を明らかにする。訪問教育を実施する上での問題点と満足度を明らかにし、学校別による担当教員の特徴を検討することを目的とする。

（方法）

手続き: 新型コロナウイルス感染拡大予防のため、「問券星」という中国の民間 Web サービスを使用し、質問紙を電子フォームで配布し、無記名記入し、回収集計した。
対象: 中国における訪問教育を実施する特殊学校と通常学校の訪問教育担当教員を対象とした。130 部の質問紙を配布し、112 部を回収した。有効回収率は 86.1%であった。調査項目: 教員の基本情報: 年齢、所属学校、訪問教育経験年数など; 教員の訪問教育に対する満足度尺度調査: 教員に求められる資質; 教員の働き方など。

（結果）

1、教員の基本情報

今回対象とした訪問教育担当教員の訪問教育経験年数では、「3 年以下」の教員は 72 人 (64.3%) であった。特殊学校の教員は 93 人 (83.1%)、通常学校の教員は 19 人 (16.9%) であった。

2、訪問教育担当教員の訪問教育に対する困難要因

訪問教育における困難点に対する考えについて、21 項目の 5 件法で尺度を作り、回答を求めた。結果について、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った ($KMO=.828, p<.001$)。その結果、いずれの因子にも十分な負荷量 (.40) を示さない 3 項目が除外され、5 因子 18 項目が抽出された。第 1 因子は「指導中における専門能力」(5 項目) に関する因子であると解釈された。第 2 因子は「学校の機能」(4 項目)、第 3 因子は「教員の働き方」(3 項目)、第 4 因子は「各機関の連携」(3 項目)、第 5 因子は「教員に求められる資質」(3 項目) であった。内的整合性を検討するために、各下位尺度の α 係数を算出し、いずれも $\alpha>.70$ で、高い値であった。

訪問教育における担当教員の困難点の 5 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「指導中における専門能力」下位尺度得点 ($M=2.71, SD=0.98$)、「学校の機能」($M=3.63, SD=0.98$)、「教員の働き方」($M=2.50, SD=0.84$)、「各機関の連携」($M=2.53, SD=1.01$)、「教員に求められる資質」($M=3.33, SD=0.91$) とした。第 1 因子、第 3 因子と第 4 因子の平均得点は低い項目があり、担当教員の専門能力と資質、各機関の連携の不足が主要な困難要因であることが示唆された。第 2 因子と第 5 因子において、各項目の平均得点が高く、訪問教育に関する教員研修や、学校の機能が整備され、教員の勤務意欲も高いので、訪問教育を適切に展開している上で有用な要因であると推測された。

教員の所属により、特殊学校群と通常学校群の両群をわけ、各群の下位尺度得点を算出し、U 検定を用いて比較した。第 1 因子「指導中における専門能力」と、第 5 因子「教員に求められる資質」に特殊学校の教員と通常学校の教員に有意な差が認められた ($p<.05$)。通常学校の教員は特殊学校の教員より、指導中における専門能力と個人的な資質はま

だ十分ではないことが示唆された。

（考察）

訪問教育の対象生徒に対し、多くの担当教員は指導中に求められる自身の専門能力の不足を深刻に捉えており、「リハビリテーションの指導ができない」や「カリキュラムの開発能力が不足」などが特に困難さが高い問題であることが今回の調査で明らかになった。加えて重度あるいは医療的ケアが必要のある生徒に対する指導能力が十分ではないことを訴える者もあった。さらに、指導内容の編成などについては、担当教員の個別の判断に負うところが多く、指導の内容・範囲・困難さが教員によって大きな悩みであったと指摘されている（早坂・川住，1999）。担当教員は各機関との連携について、満足度は低く、とくに医療機関との連携が足りず、生徒の医療的ニーズにも応えられないという問題も浮き彫りにされ、今後教育機関と医療機関など他職種との連携を構築した上で、対象生徒により良い訪問教育を展開するように、医療関係者の指導や助言を求めたり、訪問教育の研修の機会を設けることなどが望まれる。

中国は通常学校と特殊学校の教員いずれもが、訪問教育を担当することとされているが、教育環境や教育経験が異なるため、特殊学校の教員、通常学校の教員、それぞれに問題点があると分かった。董・陳・何（2015）によると、中国における、特殊学校の教員は訪問教育の指導において主要な役割を果たしており、通常学校の教員は、それに補助的に協力している傾向もあると指摘されている。今回「指導における専門能力」と「教員に求められる資質」に関する項目の平均的な得点が低く、特殊学校の教員に比較して、通常学校の教員は対象生徒に対する指導能力はまだ十分ではないことが推測された。通常学校の教員は障害のある生徒に対する教育経験は少ないため、専門性が高い内容を的確に実施できない状況が生じやすい恐れがあると推測される。中国の障害者教育条例（修訂）（2017）により、特殊学校と通常学校の教員のいずれもが、訪問教育を担当することが指示されているが、具体的な役割の分担はまだ詳しく明示されていない。現在、特殊学校と通常学校が連携し、協働での訪問も試行されている。今後、各学校の教員は訪問教育において、教育経験の違いを認識しながら指導内容を打ち合わせ、それぞれの役割を補完していく仕組みを作っていくことが今後の訪問教育の体制構築にとって重要な課題である。特殊学校と通常学校の教員に対し、どのような専門的な研修を展開していくのかについて、今後さらに検討していく必要があると考えられる。

（文献）

早坂方志・川住隆一（1999）訪問教育における担当教員と保護者との関係づくりと相互協力に関する研究—家庭訪問教育に焦点を当てて—。国立特殊教育総合研究所研究紀要, 26, 1-11.

董桂林・陳小玲・何志芳（2015）佛山市重度残疾兒童送教上門教師工作現狀的調查研究。現代特殊教育（高教）, 8, 8-11.

中国国务院（2017）残疾人教育条例（修訂）。(WANG Qingtong, TAKEDA Kazunori)